

「二十一対十九。ゲーム、青柳先輩！」

最後のシャトルが白線の内側へ落ちた瞬間、体育館のあちこちから歓声が上がった。四大学合同のバドミントンサークル合宿は今日で三日目。いくら大学生で若いとはいえ、朝から夕方まで練習漬けでは体力も尽きる。僕——青柳滯は肩で息をしながら、ネットの向こうを見た。負けた晴臣くんは悔しがるどころか、床へ落ちたシャトルを拾い上げて、日に焼けた顔いっぱいには笑っている。

「やっぱり強いな、滯さん。今の絶対アウトだと思ったのに」

「う、ううん。今のはたまたま入っただけだから」

「厳しいなあ。もう一試合してくださいよ」

「ごめん。もう三試合目だから、少し休ませて」

試合に勝てたのは嬉しい。それでも人に注目されることが苦手な僕は、歓声が集まっただけで居心地が悪くなり、早くコートを離れたくなっていた。

「晴臣。次、コート空けろって」

後ろから聞こえた低い声に振り返る。晴臣くんと同じ大学の二年生、仁成くんが無表情で立っていた。黒髪に細身の体格で、騒がしい晴臣くんとは対照的にほとんど喋らない。

「分かってるって。仁成も滯さんと打ってもらえば？」

「……俺は見てたからいい」

「何をだよ」

仁成くんは答えず、僕が握っていたラケットへ視線を落とした。

「青柳先輩。グリップ、替えたほうがいいです。汗で滑ってる」

「うん。教えてくれて、ありがとう」

礼を言うと、仁成くんは小さく頷いて晴臣くんの

腕を引いた。口数は少ないのに、僕が疲れていることには誰より早く気づく。合同練習が始まってから、何度もそうだった。二人が別のコートへ移ってからも、晴臣くんの明るい声は体育館中に響いていた。対して仁成くんは黙々とシャトルを追い、時折こちらへ目を向けてくる。正反対の後輩二人に、なぜ揃って構われるのか分からない。

（話しかけてくれるのは、嬉しいけど……）

嬉しいと思う反面、二人と目が合うたびに緊張してしまう。それに僕には、同じサークルの仲間にさえ明かしていない身体のコツがある。生まれつき、僕の下半身には男の身体にあるはずのものがない。代わりにあるのは柔らかな割れ目と、その上に埋もれた小さな突起だ。世間ではカントボーイと呼ばれる身体らしい。細身で中性的な見た目をからかわれても、僕は笑って聞き流すことしかできない。もし裸を見られたら、今までと同じ男として扱ってもらえなくなるかもしれない。

「……どうして、僕なんかを気にするんだろう」

その夜も、僕はサークルの雑用を口実に部屋へ残った。翌日の組み合わせ表を確認し、仲間が全員浴室から戻るまで待つ。消灯まで一時間を切った頃、着替えとタオルを抱えてようやく部屋を出た。廊下には人の気配がない。浴室の入口へ、裏返しておいた「清掃中」の札を掛け、誰も残っていないことを何度も確かめてから中へ入った。

「でも、今だけだろうし……」

合宿が終われば、もう顔を合わせる機会も減る。それより早く身体を洗って部屋へ戻ろう。そう思ってシャワーの温度を少し上げたとき、脱衣所側で何かが倒れる音がした。

「あっつ！」

「お前がもうひと勝負とか言うから、遅くなった」

「いや、だって負けたままじゃ悔しいしさ」

聞き覚えのある声に、全身が強張った。

「ま、待って……まだ入ってるから！」

叫んだときには遅かった。曇ったガラス戸が横へ開き、晴臣くんと仁成くんがシャワー室へ入ってくる。二人とも練習着のままだった。晴臣くんの手には、昼間使っていた青いリストバンドが握られている。

「滯さん？」

「どうして、二人が……」

「リストバンド落としたから探しに来たんです。入口の札が出てたから、もう誰も使ってないと思って——」

そこまで答えた晴臣くんの声が止まった。二人の視線が、僕の顔から濡れた胸元へ、それから下半身へ落ちる。隠さなければと思ったのに、手足が動かなかった。秘密を知られた。その事実だけで頭の中

が真っ白になる。

「見ないで……！」

床に置いたタオルを取ろうと踏み出した瞬間、足の裏が滑った。

「滯先輩」

仁成くんが咄嗟に腕を伸ばし、倒れかけた僕の腰を抱き留める。濡れた裸身が練習着へ押しつけられ、余計に逃げ場を失った。

「は、離して……っ」

「今離したら転びます」

「お願い、離して……！」

「滯さん、落ち着いて」

晴臣くんは床のタオルを拾い、僕の腰へ巻こうとした。いつもの軽い笑顔は消えている。